

2019.11.19 (火)

「タクシー運転手」との出会い

大谷 信介

タクシー運転手のアルバイト

今日は40年前のお話をしようと思っています。私は40年前、大学院生の頃にアルバイトでタクシーの運転手をやっていました。私は筑波大学の1期生だったもので、当時大学周辺は全く整備がされてなく、車がなかったら何もできない状況でした。最初、大学2年生のときに、近所の自動車修理工場の社長さんと出会いました。車の修理に行ったのですが、その時に「アルバイトをしないか」と誘われました。どのようなアルバイトかという、車検を取りに行く代行の仕事です。当時茨城には、車検事務所が水戸にしかありませんでしたので、車検を取るには土浦から水戸まで運転していかなければなりません。修理工場の人が1人と1台しか取りに行けませんから、アルバイトを使って2台一緒に取りに行くというアルバイトでした。その当時土浦から水戸の往復と車検の検査を受ける作業で5,000円もらっていました。約半日の運転だけですむ、とてもいいアルバイトでした。

その修理工場の社長さんから次はタクシー会社の社長さんを紹介してもらいました。その社長さんから「二種免許を取ったらアルバイトをしていいよ」という話をもらいまし

た。でも、3年たたないと二種免許は取れないので、大学院の1年生のときに水戸の試験場に行って二種免許を取りました。学科も実技試験もあり、免許を取るのも大変でした。それでタクシーのアルバイトを始めました。その会社は、荒川沖という土浦の1個手前の駅にある荒川沖タクシーという会社でした。今もあると思いますので、筑波のほうに行ったら見てみてください。

タクシー会社の社長さんは、「車が空いていれば、いつ来てもいいよ」と言ってくれました。タクシーは、昼間はあまり稼げませんから、夜だけ行くというバイトをさせてくれたのでした。夕方6時頃に会社に行って、そこでタクシーに乗り換えて駅に行きます。それで終電が12時半頃という感じで、乗り過ぎし客がいっぱいいますから、それも稼ぎの大きい部分を占めていました。その客を1時頃まで実車して、車を手洗いで洗車をして2時ごろ帰宅するという具合でした。その当時はタクシーも非常に条件が良かった時代で、一晩で約1万円アルバイト代がもらえました。その当時の1万円というのは、今の1万円とはちょっと違い、結構価値があり金銭的にもとてもいいアルバイトだったと思います。また、大学院生の私にとって更によかったことは、待ち時間に本が読めたこと

でした。タクシーは、基本的に、待ち時間が半分なので、その待ち時間に本が読めました。わたしが読んだ社会学に関する本のほとんどは、洋書も含め、タクシーの待ち時間に読んだものでした。また、私が社会学者になれたのも、タクシーの仕事を通して、いろいろな出会いも含め、社会というものを勉強できたことが、とても大きかったと思っています。今日は、どんな出会いがあったのかという点から、タクシーの仕事について話してみたいと思います。

タクシー運転手の掟

まず初めにタクシー会社の運転手さんたちとの出会いがありました。何もわからないのでいろいろ運転手さんたちに教えてもらいました。大学院生がタクシーのバイトをやっているということ自体が珍しかったので、基本的には非常にかわいがってくれました。どちらかというと、世間からはタクシーの運転手は、低く見られていたのが現実でした。とても人のいいおじさん達が大半でしたが、中には怖そうな人も正直いました。会社の事務所で喧嘩をして傷害事件で警察が来たこともありました。また、お金のルーズな人もいました。タクシーというのは、お金をまず運転手がもらいます。それを会社に納金するわけです。夜遅くなると納金をせず帰ってしまう場合もあるわけです。それを持ち逃げしたり、それをいわゆる競輪・競馬で使ってしまったりする人もいたのが現実でした。いろいろな人がいましたが、一緒に働いていて必ずすべての人が守っていたルールがありました。それは、順番でした。駅構内にはすべてのタクシーが入れないので、待機場で待っていま

す。この順番は到着順なのですが、すべての人が必ずきちっと守っていたまさに掟のようなものでした。

タクシーにおける順番については、宿命的なものを感じました。タクシーは、順番でお客さんが決まります。駅で待って「どこどこへ行ってください」と言ってお客さんが乗って来ます。当然近い距離の人と、遠い距離の人がいます。当たり外れがあるわけです。やはり歩合制ですから、遠い距離のほうが儲かります。当時、初乗り料金が450円ぐらいだったと思います。初乗り料金が450円の頃に、いわゆる筑波の研究学園都市のほうへ行くと2,000～3,000円しますから、450円の所とではだいぶ違うというので、バイトを始めた最初のうちは、いつも「あー」と思っていました。「ついていなかったな」とか、「ついていたな」とかいうのを、毎日のようにやっていると、だんだん考えなくなるというのも分かってきました。熟練の運転手さんに教わったことですが、「最近はどういったことを全く考えなくなった」と言っていたのが、バイトを進めるにしたがってわかっていくように感じました。順番は、「与えられた運命なのだ」「たまには、いいこともあるし」とだんだん感じるようになって自分が結構面白かったです。

お客さんとの出会い

タクシーのバイトで一番社会勉強になったのは、お客さんとの出会いでした。トータルで4年間バイトをしましたので、とにかくいろいろな人と出会いました。どのような人がいるのかというと、学園都市でしたから、大学の先生もいれば研究所の人たちもいま

す、それはいわゆる結構遠くなるので、金銭面ではとてもよかったです。その人たちを乗せるのは全然面白くなかったです。あまり話もしませんし、横柄な場合も多々ありました。

お客さんを乗せて特に社会勉強になったのは、無線で受ける常連のお客さん達でした。タクシーは基本的に駅で待っているのですが、途中無線を受ける場合があります。無線は、空車で近くにいる場合に無線を取ることになります。というのが常連客かといえますと、会社の社長さんだったり、病院に行く老人さんだったりしますが、よくあるのが夜のお仕事、キャバレーのホステスさんとかソープランド嬢さんとかです。そういう人たちは、どういうふうに話をしていたり、どのようなことをしているのかが見えるわけです。会話をします。よくヤクザさんのひものような人と一緒に乗って来たりします。その場合どのような会話がされているのかとさすがに勉強になりました。特にタクシーの運転手というのは低く見られていますから、いわゆるヤクザ系の人には親近感を持たれているという感じがありました。一度、「運ちゃん、これ覚醒剤だよ」とビニール袋に入った顆粒のようなものを見せてもらったこともありました。「恐ろしい」と思いながら、「こんなふうで世の中が動いているのか」と思いながら、いろいろなことを考えさせられました。

常連のお客さんからはチップも結構もらったりしました。ワンメーターで悪いなと言って、1,000円出して「おつりは要らないよ」と言うお客さんも結構いました。料金が450円だとチップが550円でした。その他にも「細かいのはいいよ」と言ってさりげなくチップをくれるお客さんもいました。ア

ルバイトにとっては結構チップも大きかったです。経験を積んでいくと、「チップをくれる人たち」という人間像を考えるようになりました。基本的には、サラリーマン層にはあまりいませんが、自営業の人や中小企業の社長さんとか、やはりお金周りのいい人だったかなあと考えたりしていました。

その他にもいろいろな人がいました。とにかく4年も夜タクシーをやっていると、酔っ払いも当然たくさんいました。酔っ払いはとにかく厄介なことが多かったです。酔っ払っていますから、T字路に行って「お客さん、右ですか、左ですか」と言うのと、「真っすぐだ、真っすぐ行け」とずっと言うのです。真っすぐ行けないわけですからとても困ってしまいました。そういうときにタクシーの運転手の先輩たちが、どうやって教えてくれたかという、「そういうときは、警察に連れて行けばいいのだ」と教えてくれていました。実際に1回警察に連れて行ったことがありました。警察というのはすごかったです。あの当時はピンピンと酔っ払い客を殴りました。それで「運転手さんに迷惑をかけるのではない」と言って対処してくれました。その時の先輩の助言は大変貴重であり、処世術というのはいろいろあるのだなと思いつつながら、いろいろ感じることもありました。

あと、例えば料金を払わない人というのがいたりしました。1回ありました。料金を踏み倒す人です。これも先輩運転手さんに、「女だよ、男はいないよ」と教わっていました。実際にあったのはどういうことかという、「トイレに行きたいです」と女性客に言われたのです。そこでトイレを探し公園のトイレで停車しました。そこでずっと待っていたのですが全然帰ってきません。「長いな

と思いつながら、「相当お腹が痛いのだろうか」と思っていました。実際のところはどこかに消えていたという話でした。そのようなこととか、いろいろな経験が、社会や人間についていろいろなことを考える契機となり、私の社会的なセンスが大きく磨かれたと思っています。

タクシー運転手経験から学んだこと

あと、お客さんたちの会話もいろいろ勉強になりました。タクシー内で経験した会話もいろいろなことがありました。夫婦げんかをマジでする人達もいれば、いろいろ話し掛けてくる人もたくさんいました。天気や野球の話はよくあるのですが、話し掛けてくるときに一番多かったのが、「もてるでしょう!」という話題でした。確かに23歳ぐらいの大学院生が運転手をしているわけですから、変わった運転手として映っていたのだと思います。「運ちゃん、もてるでしょう」と言って、「いいことがあるのではないの?」とか言われているいろいろなことを聞かれたことをよく覚えています。

お客さんとの会話の中で、やはり引っかけたのが「運ちゃん」という言葉でした。学園都市なので筑波大学の学生たちも乗ることがありました。私は1期生でしたから全部後輩なわけですが、「こっちが一生懸命働いているのに」と思いつながら、「運ちゃん」と言われたときは、本当に腹が立ちました。学生に「運ちゃん、大学に行ってよ」と言われて、「何を言っているのだ」と思ったことを今でもよく覚えています。みなさんも、ぜひ「運ちゃん」という言葉は使わないように気をつけておいてください。

あなたたち学生は、これまでの人生の中でほとんど自分と同じような階層の人と付き合ってきました。大学生の友達を考えてみれば、ほとんど同じような階層の人たちばかりです。それは小中高時代もほぼ同じような階層の人たちと会話をしてきたわけです。ほとんど他の世界のことは知りません、また知る必要もないのかもしれませんが、社会には、いろいろな人が存在していることについては、考えてみる必要があると思います。それが社会学をしていく上ではとても大事な点だと思います。タクシーの運転手をやっていると、社会全体がよく分かってくるという意味では、私自身大変勉強になったと思います。

最後に、一つ運転手の経験の中から思ったことを話してみたいと思います。一つ思ったことというのは、私も運転手ではなくてお客でタクシーに乗るときがありました。皆さんもタクシーに乗ったことがあると思いますが、タクシーに乗ったときに、「運転手さんがメーターを上げるように運転しているのではないか」というふうに思ったことがあるのではないのでしょうか?実は私もそう思っていました。「何か知らないけれども、メーターが上がる!」、「だいたい停車する直前に、必ずカチャッと上がってしまう」。皆さんもそう思ったことがあるでしょう。「メーターを上げたいと思っているのかな」と、私がお客側から見えていたときは、そのように疑っていました。実際運転手になってタクシーをやったときに、何を考えているかという、全くメーターのことは考えていませんでした。むしろ「どこに停まったら、お客さんが降りやすいのだろうか」と考えているということがありました。「それがそうだったのか」とい

うことを、タクシーの運転手をやって初めて感じるようになったのです。それは何なのかというと、視点が違うわけです。お客の視点から見たメーターと運転の関係と、運転手側から見た運転の実態とでは、だいぶ違いがあるということです。

よく学生に「視野を広げなさい」ということを言いますが、視野を広げるだけでは分からないことがあり、「視点を変える」ということが非常に重要だということ学んだのでした。皆さんも、いろいろな意味で視点を変えることが非常に重要で、違う人の見方からしてみると、物事が違う見え方がするということ、ぜひ学んでいただきたいなあと思っています。とにかくタクシーアルバイ

トの4年間で、私の社会学的センスを育て、社会学者大谷信介を生み出したと、私は強く思っています。

大学院時代のタクシーのアルバイトの話は、これまでほとんど大学で話しをしたことがありませんでした。おそらくタクシーの話は社会学部の先生たちもほとんど知らないことだと思います。いずれ定年でもしたら、またタクシーでもやってみるかなという気もしています。何せ結構その仕事楽しかったからだと思います。「出会い」ということで思い付いたのは、私の40年前ぐらいの大学院時代の4年間のタクシーのアルバイトの話でした。どうもありがとうございました。

(社会学部教授)